

30 幕府の動揺と応仁の乱



あうにん らん
 応仁の乱って、確か戦国時代のきっかけになる戦いですよね。

そうです。この戦いをきっかけに、日本社会そのものが転換したとも言えます。



あしかがよしみつ よしちち
 足利義満^{-p.80}の後は子の義持が4代将軍となります。義持も子の義量に将軍職を譲りますが、義量が先に亡くなり、義持が事実上の将軍として職務を行います。義持は他に子供がおらず、後継者をくじ引きで決めろという指示を出して死にます。

当時、くじには「神の意志を問う」という意味があり、源氏の氏神である石清水八幡宮の意志をくじで問おうとしたわけです。その結果、義持の弟の足利義教が6代将軍に決定しました。

義教は強力な政治を進め、敵対関係となった鎌倉公方^{-p.80}の足利持氏を1438年に討滅します（永享の乱^{*}）。ところが義教の強圧的なやり方に怯えた赤松満祐は、1441年、京都の自邸に義教を招き謀殺します（嘉吉の変）。将軍が部下の守護の家で殺されるという、将軍の権威が落ちたことを示す出来事です。

その後、子の義勝が後を継ぎますが若死にし、同じく義教の子の8代将軍足利義政が将軍になります。義政にも子がおらず、弟の足利義視を後継者にしようと思いますが、その後、夫人の日野富子が男の子（足利義尚）を産みました。その結果、次の将軍は弟の義視か、実子の義尚か、という将軍家の後継争いが起こります。

当時、幕府の実権は、細川勝元と山名持豊（宗全）が争っていました。将軍後継問題と、幕府の実力者の争いが連動し、畠山氏の家督相続争いをきっかけに、京都で戦闘が起こります。これが1467年に始まる応仁の乱（応仁・文明の乱）です。

乱の勃発後、一年もたたないうちに京は完全に焼け落ち、1473年に細川勝元・山名持豊がともに死去した後も争いは終わらず、1477年にようやく両軍は戦いを止めました。

* 1 永享の乱は、鎌倉公方と関東管領・上杉憲実の対立を利用した、一種の弾圧策でした。この後、結城氏朝が特氏の子どもを擁して幕府に挙兵する結城合戦が起こり、大きな動揺が鎌倉府を襲います。その後、関東では上杉憲実の勢力が確立します。



応仁の乱の東軍と西軍の区別って、何度聞いても忘れてしまいます……。

下の表のように東軍と西軍の区別はおぼえるしかないです。でも、1468年になると、足利義視が西軍側に移り、室町御所を拠点とした東軍方が義尚を担ぐこととなり、幕府が東西に併存するかたちとなります。



■ 応仁の乱直前の対立関係

東軍		西軍
細川勝元	幕府の実力者	山名持豊
義視	足利将軍家	義尚
政長	畠山氏	義就
義敏	斯波氏	義廉

この図を利用して、東軍・細川・政長・義視の各々の各々の中から1文字を取り、「東」の「川」は「長」「視」える」というフレーズをおぼえてしまうのも一つの手段です。

畠山氏・斯波氏^{-p.81}をはじめ、どの有力な守護家でも、当時は跡目（家督）の争いが常に存在していました。これは、鎌倉時代の分割相続^{-p.70}が、南北朝を経て、所領の細分化を防ぐために単独相続に移行したことが原因です。父親の財産を後継者が全て相続すると、残りの兄弟は財産を一切相続できないわけです。そのため、後継者たちは、その家臣団を巻き込んで常に厳しく対立していました。



長く戦争が続いた結果、結局は強いものが勝ち、力の無いものは容赦なく排除される、下剋上と呼ばれる傾向が一挙に表面化します。庶民からも集められた足輕が集団戦に登場し、戦闘が武士の間だけのものではなくてきます。この応仁の乱を契機にして、日本の支配者層が組み変わっていったと言えます。

それで、戦国大名^{-p.94}たちの群雄割拠が始まるわけですね！

